

狼たちへの伝言

落合信彦



小学館

彦信合落



小学館

●著者

落合 信彦

狼たちへの伝言

1988年12月10日 初版第1刷発行

©Nobuhiko Ochiai 1988

1989年3月10日 第4刷発行

著者 落合 信彦

出版者 相賀 徹夫

発行所 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

電話 編集 東京 (03) 230-5525

業務 " (03) 230-5333

販売 東京 " (03) 230-5739

振替 東京 8-200番

印刷所 凸版印刷株式会社

Printed in Japan

ISBN4-09-380341-2

●造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

●本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは著作者および出版者の権利の侵害となりますので、あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

はじめに

ジャーナリストとして、オレがものを書き始めたのは、11年前のことだ。デビュー作の『二人の首領』、そして『2039年の真実』。反響は、かなりのものがあつた。だが、それまでアメリカでやっていたオイルビジネスに比べると、儲かる仕事ではないな、というのが実感だつた。当たつたところで数千万円。百万ドル単位の勝負をしてきたオレには、賭けとしても、おもしろみに欠けていると思つた。

そのころ、アメリカ時代の仲間から、新しい仕事のオファーも入つてきた。書くのはやめて、アメリカへ戻ろうと、半ば決心していた。それを、ある編集者に話したところ、彼はしんみりとした口調で、オレにこういつた。

「落合さん、活字というものは、書くということとは、他人の人生を決定する力さえ持っているんです。石油がいかにおもしろい勝負だとしても、活字ほど他人を感動させる力はない。やめるの

は、あなたの自由だが、それは活字の力を本当に知ってからでも遅くはないでしょう」

彼の眼からは、涙がこぼれていた。いまでもオレがこうして書き続けているのは、その言葉に感じるものがあつたからだ。

そして、その「活字の力」を実感できる機会が間もなくやってきた。それは、22歳の若者から届いた、一通の手紙だった。汚い字だった。

「僕は、いま病院でこの手紙を書いています。体力がなくなるので、手がふるえて字がきたないのは許してください。……いまの僕の楽しみは、あなたが書いたものを読むことです。僕は落合信彦が大好きです。ただそのことだけを伝えたくて、この手紙を書きました」。そんな文面だった。

いままでこんな熱烈なファンレターをもらったことはなかった。オレはすぐ返事を書き、新刊本にサインして、その若者あてに送った。返事はすぐ来た。だが差し出し人は若者の母親からだった。

「手紙を書いた数日後、息子は亡くなりました。落合さんからいただいた本を、胸に抱きしめたまま……」

彼はガンだったのだ。残り少ない貴重な時間をオレへの手紙にあててくれた。あの編集者のいったことが、オレには痛いほどわかった。

この本は、単行本として、オレの26冊目の本だ。小説でも、ルポルタージュでもない、オレとしては初めての人生論だ。いわば、ジャーナリスト、作家としてのオレというより、落合信彦という、ひとりの男からのメッセージだと解釈してもらって、かまわない。

今の世の中は、ブタのような人間ばかりがはびこり、万事「金」のつまらない価値観ばかりがあふれている。若者は、といえば、その風潮にどっぷりとつかり、たかだか数千万円の住宅ローンが、人生最大の冒険、という寂しい生き方に満足し切っている。だが、人生は本当にその程度のものなのか。そうではないだろう。小利口に生きること捨て、大きな馬鹿として生きれば、世の中はどんなにおもしろいか。退屈しないか。それだけを伝えたくて、オレなりの人生論を出すことにした。

オレの考えを押しつけるつもりはない。だが、この本を読んでくれた若者のうち、何人かでも、何ものかを感じとって、少しでも面白く生きる術を手に入れてくれれば、オレとしてはこれ以上の喜びはない。そしてこの喜びがある限り、オレはモノを書き続けたいと思う。

1988年秋

落合 信彦

狼たちへの伝言

目次

1、生きるということは攻めることだ。防衛的な人間におもしろいヤツなんていない。

9

2、悪しき平等社会、ニッポンにいと他人ばかり気になる。しかし、自分の首に値札をぶらさげるような生き方はやめろ！

19

3、ケネディは雪のニューハンプシャーでキックオフした。ほんとうに死んでもいいという覚悟がなければ、真の政治家にはなれない。

26

4、負け犬は誰も相手にしない！「負けたけど、よくやった」なんてのは日本人だけのメンタリティーだ。

36

5、*「愛」*という言葉を口にできる政治家が日本に一人でもいるか？
そこに我々の不幸の根源がある。

43

6、テロなんて関係ないとばかりノー天気海外バカンスがブームだが、

「いま」世界は少しも「平和」なんかじゃない。

49

7、イイ女を抱きたかったら、DCブランドに身を包むよりエキサイティングに生きることだ！

56

8、外国人はコミックをむさぼり読む人間をインテリとは認知しない。

世界を目ざすなら、そのことだけでも知っておけ！

64

9、女どもに「やさしい男が好き」などといわれてヤニ下がっているヤツは、人生でも必ず負け犬になる。

72

10、苦しみも悲しみも人生のスパイス、自分自身の二本の足で立つしかない！

82

11、ローンで身を飾り、ラーメンをすすって外車を取りまわしたって、男の価値は上がりやしない。

90

12、戦争はいつだって老人が始め、若者が犠牲になる！

100

13、櫓の外のブタは死ぬ。死にたくなかったら、血ヘドを吐いて狼になるしかない。

14、大学は就職や出世の手段でなく、真実と正義を追求する場所だということを、もう一度認識してくれ。

15、ダブル・インカム・ノーキッズなんて無能な広告屋がデッチあげたファッションだ！ その本質は去勢された男の逃避行為でしかない！

16、*「絶対」*を認めない柔軟な発想から、斬新なアイデアやイノベーションが生まれる！ 軽々しく「正義」を口にする連中は信用するな。

17、コスモポリタンを目ざすなら、皮膚の色がもたらす生理的違和感も忘れるな！

18、平和ボケ日本人にはわからない！ 犠牲者の悲惨とは別に、国家とは冷酷なものなのだ！！

19、人生はゲーム。酒も、女も、仕事も、真剣に取り組めば男は必ず光る！

20、エコノミック・アニマルで結構。資源のないこの国の安全を守るのは、ビジネスしかない。

21、「さよならだけが人生さ」と言った詩人がいる。だが、出会いのほうかはるかにエキサイティングだ！

22、諜報の本来の役割は、戦争を防ぐことにある。そこを勘違いした日本人の諜報アレルギ―は、もう捨てさるべきだ！

23、すべてをさらす勇氣、そしてたとえ敗れても、機を見てまたのし上がる、そんな氣概。それがサクセスへの王道だ！

24、よく、國際人とは？ と聞かれるが、ひとつにスケールの大きさだと考える。もっと言えば、その人間のキャパシティの広さだ。

25、男にとって大事なのは目的を持つこと。それに加えて、きちんとした思考を持つ。そうすれば、夢も金も、名前も実力も、女さえも手に入れることができる。

●本書は雑誌『G O R O』に連載されている『ブタは死ね！』の1987年21号～1988年23号分を一冊にまとめたものです。(現在も好評連載中)。

●装丁／玉井ヒロテル

1、生きるということは攻めることだ。防衛的な人間におもしろいやつなんていない。

チャンネルのズレ

外国に出かけて日本に帰ってくるたびにオレは、この日本という国のいいようのないチャンネルのズレを感じてしまっている。

ひとつだけいえる。政治のレベルが低いんだ。政治家にロクな人物がない。

たとえば、いささか前のことになるが、自民党の総裁選び。

ニューリーダーと呼ばれていた60過ぎの男たち。それを「ニューリーダー」と呼ぶ国も国なんだが、彼らは、私が総裁になったらこれをしますと、一人としていかなかった。外交はこうします、とも明言しなかった。ただ黙って潮が満ちるのを待っているだけ。

それは、日本では通用するかもしれないが、いまの国際情勢では絶対に通用しない。オレの体験からも、それは断言できる。

ニューリーダーと呼ばれた3人の特徴は何か。それは彼らが非常に退屈で、つまらない人間だ、ということ。

オレは中曽根康弘が大嫌いだ。これまで、いろいろな経緯のなかでぶつかりもした。ただし、それは彼が攻撃的な人間だったからで、逆に中曽根を評価できる点でもある。

竹下登だとしたら、おそらくのれんに腕押しだろう。防御的な人間でもしろい人間なんて、ひとりもない。おもしろいヤツはみんな攻撃的だ。

その竹下登がサミットに出席した。列強のプライムミニスターとかプレジデントとかの恫喝のなかで、アイツは縮みあがっていた。

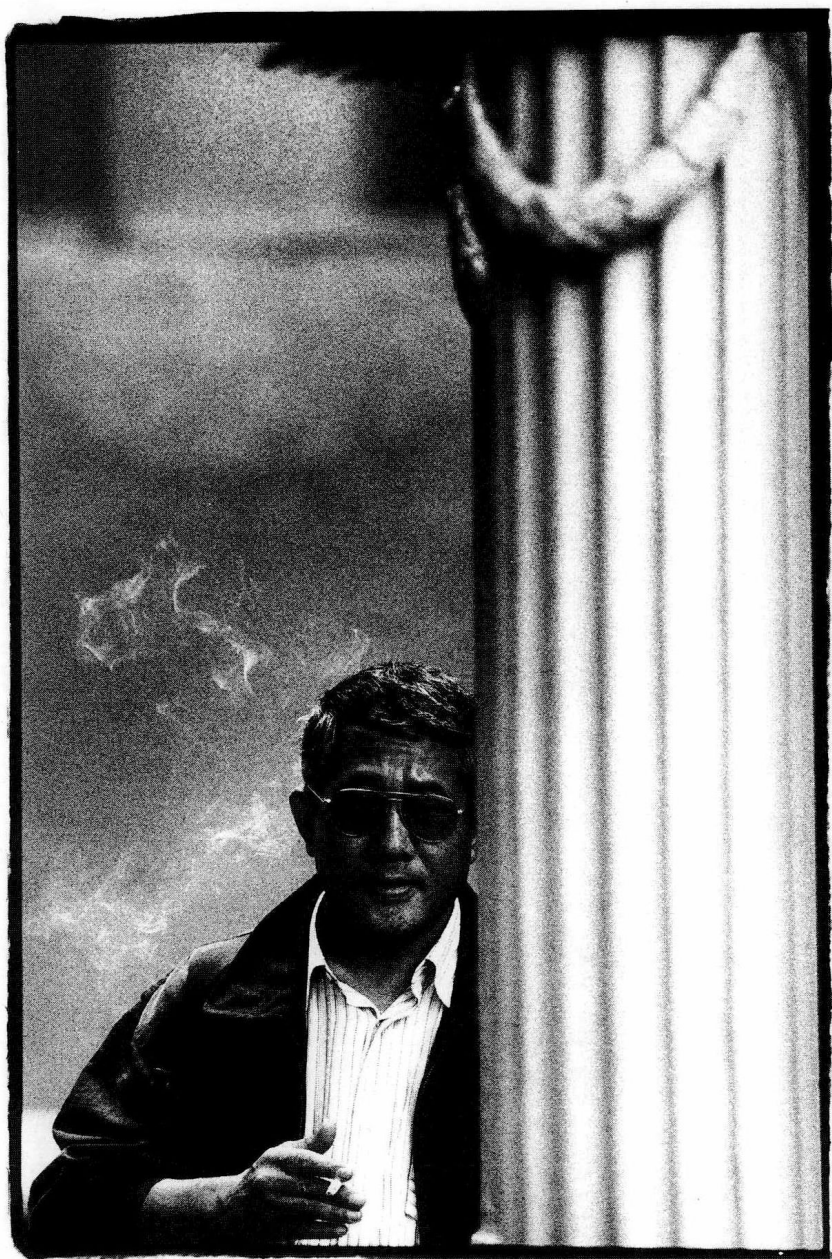
悪いが、アイツは村の青年団の団長にしかすぎない。代用教員、それも英語もできやしない代用教員なんだよ。

島根県の奥にいる小利口な政治家。それはそれでいい。しかし、その人物が国家を奪れるという矛盾を、この国は持つてしまってるんだ。

1981年、オレはイスラエルに、世界最強の諜報機関モサドの取材でいた。

ある日、モサドの将校がオレをジープに乗せてウエストバンクを案内してくれた。ヨルダン川の西岸、その場所は、1967年の『六日戦争』でイスラエルがヨルダンから奪った地域。

死体ごろがってた。50度の炎天下、オレはジープをおり、そのうつ伏せになってる死体の顔を見ようと思った。制服を見ると完全にPLOなんだ。



触ろうと思つてかがんだ途端に、将校が後ろから「ホールドイット！」と叫んだ。「待て」というわけだ。

「ちよつとこつちにこい」

オレはジープの後ろに行つた。すると、彼は、やにわにワルサーを腰から抜いて、死体に狙いを定めるんだ。そして撃つた。

死体がいきなりドーンと爆発しやがつた。人間爆弾だつた。

この一事が現在の中東をすべて象徴している。ユダヤ人というのは、必ず死体を埋める習性があるんだ。敵でも味方でも。PLOはそれを知つていた。

そのアラブ人の死体は、自分の弟かもしれない。兄貴かもしれない。父親かもしれない。それを、腹わたを出して、爆弾を詰めて縫つて、線を体じゅうに回す。触つた途端に爆発するように仕掛けるんだ。

同胞の死体までをテロの道具として使うPLO。その死体に銃弾を撃ちこまなければならないイスラエル人。

これなんだよ。日本人はこれがわからないから、1983年にアラファトがベイルートから撤退したときに、日本の新聞は何といったか。「さらば、PLO故郷はいずこに」と見出しをうつた。あくまで情緒的に事を理解しようとしちゃう。それが違う。

日本人の本質は浪花節で、演歌だ。それそのものは否定しない。オレも演歌は好きだから。

ただし、国際情勢に関する限り、演歌も浪花節も通用しやしない。われわれ日本人はまず、それを冷徹な事実として認識しなければならない。どうもチャンネルがズレている。

インターナショナルヘラルドトリビューンを読むと、それこそ、毎日戦争が起きるんじゃないかと思う。

ところが日本の新聞はどうだ。芸能人のだれそれが死んだ、中江某という詐欺師が8年を求刑された云々といった、どうでもいいコップのなかの嵐が堂々一面で展開されている。

オレはとまどってしまふ。

偉大なエゴイスト

オレの親父は「世界一」といいいいぐらいの偉大なエゴイストだった。女をつくつて女房と子供たちを捨ててズラかつちやうぐらいだ。残されたおふくろは、それでも屋台を引っ張つてオレたちを育ててくれた。

親父にとつて、おふくろは3人めだった。だから、一緒に逃げた相手は4人め。確か、いちばん最初が吉原の芸者で、彼女は銭湯でひっくりかえつて頭打つて死んじやつたらしい。2番めのは雑巾がけか何かしてるときに脳溢血で死んでる。

オレは、親父が50のときに生まれた子で、おふくろは15歳違つてたから35。兄貴が一人で、下に妹が一人。

親父が家を追ん出たとき、オレは中学1年、13だった。彼は真つ赤なベレー帽をかぶつて、麻

の三ツ揃いかなんか着て、厚化粧の派手な着物の女の手を握りながら、おふくろとオレたち子供を前にして、こういった。

「おれはおまえたちのために生きてるわけじゃない。だから自由なようにさせてくれ」と。

オレたちは半ばポカンとあつけにとられて、それを聞いていたのを覚えてる。

「おれはいま、世界でいちばん幸せだ。おまえも大きくなったら、いくらでも幸せになればいい」とも。

親父はそういう放ったんだ。トンデモナイ男だったが、どこか自由のニオイのする人間だった。そんな親父の「世界でいちばんの幸せ」も永くは続かなかった。元々は博打うち。金を使い果たして、逃げた女と一緒に紙芝居を始めた。東京で最後の紙芝居屋。

女が和服着て、太鼓たたいて子供を集めて歩いて、親父がその子供らの前で、いい加減なストーリーで、口から出まかせに紙芝居やってた。同じ紙芝居で3か月、毎日話を変えてやるんだから、驚く。昔はテキ屋の親分だったから、口はうまい。

親父は徹底的な無責任一代。おふくろはまじめ一方で、どこか明治生まれの意地を持った女。どちらがどうとはいえないけど、いま考えると、性格があまりにも違い過ぎた。最初から、うまくいかない組み合わせだった、というだけ。ただし、オレにとっては二人ともすばらしい人間だった。

オレがアメリカから11年ぶりに日本に帰ってきたとき、妹の案内で親父に会いに行くと、彼は